

北米先住民タク・リバー・クリンギット族の土地に根ざす教育

飯塚 宜子

概要

2013年8月にカナダ国ブリティッシュコロンビア州、アトリンに居住する先住民タク・リバー・クリンギット族のコミュニティを訪れ、土地に根ざす生き方を次世代に伝えるキャンプに参加した。彼らは狩猟採集民としての知識や技術、すなわち動物や魚を保存食にする方法、漁労の仕方、薬用植物の見分け方など、そして動物の皮や杉の樹皮から帽子や靴などをつくるといった伝統文化を次世代に伝え、「土地を知る」ことの重要性を共有していた。彫刻などに込められた、コミュニティが大切にしているストーリーや、土地の関わりの中で立ち現れる世界観、超自然的な知覚なども意識的に伝承の対象となっていた。これらは、彼らの土地で学ばれてこそ生きるものであるが、同時にその中に環境教育として共有すべき今日的意義が内在するように思われる。例えば、社会、経済、文化、宗教などが分断されずに一体として生きられる「全体性」¹、自然から糧を得る人間の基本的な営み、また人間が土地の生態や歴史や聖性などを深く知ることによってその土地の自然が守られること、また自然への畏敬の感覚などである。彼らの土地に対する観念、関わり、敬意などはすぐれて意識的であり、私たちの「土地に根ざす教育」への示唆が見いだせる。今後、彼らの営みや自然観と自身の暮らしとを相对比较することで、私たちは次世代に何を継承していくのかという問いを意識化することなどを通して、環境教育の大切な要素や手法を明ら

かにしていきたい。

1. はじめに

北米先住民クリンギット族には「すべてはひとつ」に繋がっているという思想があり、「生命と土地の霊性と聖性を信頼し、人間と環境が一体である」²と信じているという。グローバル経済化の下、さまざまなモノや観念の標準化が世界ですすむ中、今でもこのような自然観、世界観は人々に維持されているのだろうか。維持されているならば、その世界観は次世代に伝えられるのだろうか。彼らの世界観やその継承について知ることは、例えば日本の環境教育に応用できるような普遍性があるだろうか。

そのような問題意識の下、2013年8月、カナダ国ブリティッシュコロンビア州の西北部、アトリン（Atlin）に居住する先住民、タク・リバー・クリンギット族（Taku River Tlingit）のコミュニティを訪れた。そこでは2週間にわたり、町からボートで南下した湖畔のブッシュにおいて、子どもたちへ生業や伝統文化を継承するためのトラツィニ・キャンプ（Tlatsini camp）が実施されていた。本稿においては、そのキャンプの様子を、2011年8月に実施したアトリンでのインタビューと併せて記述し、クリンギット族の土地に根ざす教育の今日的意義を考察した。

¹ 鬼頭秀一『自然保護を問い直す—環境倫理とネットワーク』筑摩書房、1996年に、宗教的・文化的リンクと社会的・経済的リンクが切り離されないかわりの全体性についての議論があり、これに基づいて考察した。

² 古川久雄「すべてはひとつ—カナダ先住民の心」『人間文化 滋賀県立大学人間文化学部研究報告』4号、1998年、pp.72-83

2. トラツィニ・キャンプの背景

北米先住民クリンギット族は、アメリカ合衆国のアラスカ州沿岸部、およびカナダ国ユーコン州とブリティッシュコロンビア州にコミュニティを点在させている。クリンギット族の人々はカラス・クランとオオカミ・クラン（沿岸部ではカラス・クランとワシ・クラン）のいずれかに属し、婚姻時はもう一方の集団から配偶者を選ぶ。生まれた子は母親の集団に属する母系制である。彼らはまた、自分たちはカラスやオオカミなど動物の子孫であるという思想を持っている。

ヨーロッパ系移民の移住以降、北米の先住民の社会や生活が大きく変容したことは広く知られている。特に 1860 年代からの約 100 年、3 世代に渡る同化政策、寄宿学校での教育などにより、タク・リバー・クリンギット族のコミュニティにおいても家族や共同体の分断が経験された。しかし今日、多くの問題を抱えながらも、伝統の生業、それを可能にする土地に関する知識、自然生態を利用する知恵や技術、文化等を再構築し、それらの次世代への伝承に意識的に取り組んでいる大人達の姿が認められる。「先住民に固有な自治権を認めるように憲法を改訂することが、カナダのファースト・ネーションの重要な目標となっている。ファースト・ネーションのうちいくつかは、土地や土地利用、資源、健康、社会サービス、教育、地方税などに対する管理権を認める「コミュニティ自治取り決め」を既にもっている」³が、タク・リバー・クリンギット族も自治政府的組織タク・リバー・クリンギット・ファースト・ネーション Taku River Tlingit First Nation (TRTFN) を運営している。オオカミとカラスの 2 つのクランは TRTFN の中に主要な制度として位置づけられている。TRTFN には、連邦政府の先住民問題・北方開発省 (Aboriginal Affairs and Northern Development Canada) から運営予算が託され、財務管理 (Finance and administration)、経済開発 (Economic development)、社会厚生 (Health and social service) などの部局がある。本稿で紹介するキャンプは、この TRTFN の社会厚生部

局と、コミュニティが立ち上げた非営利組織であるタク・アトリン管理局 (The T'akhu Á Tlèn Conservancy) が主催し、アメリカ合衆国を本拠地とする NGO ラウンド・リバー自然保護研究所 (Round River Conservation Studies (RRCS)) を含む複数の支援者からファンドを得て運営するものだった。また TRTFN はブリティッシュコロンビア州政府との間で、テリトリーの土地利用計画の協定を締結しており、キャンプでも実施される狩猟はこの締結に基づいたものである。

3. トラツィニ・キャンプの様子

アトリンは、クリンギット語で「大きな水」という意味で、アトリン湖畔の町である。船着き場ファイブ・マイル・ポイント (Five Mile Point) より 20km ほどボートで南下したパイク・ベイ (Pike Bay) で、2013 年 8 月 9 日～22 日の 2 週間にわたり、トラツィニ・キャンプは実施された。陸路ではアクセスが難しいため、毎日のように往復ボートが運行され、筆者が訪れた期間にはおよそ大人 20 名、子ども 12 名が参加していた。このキャンプで何が行われていたか、運営する大人たちへの「次世代へ何を継承しよう」と意識しているのか」の聞き取りを併せ記述したい。

3.1 生業—狩猟採集の知識と技術

クリンギット族は伝統的に狩猟採集民であり、メインとなる居住地以外に、1 年の間に移動していくキャンプサイトを複数持つ人々である。トラツィニ・キャンプはこの伝統のキャンプサイトでの暮らしを子ども達と体験するものである。

大人のハンターがムースを撃ちに行く前に、まず肉を干し燻製にするためのシェッドを皆で建てる (図 1)。肉や魚を干すための木は、ポプラの木の幹を厚めにそいで白木にして使う。幹の苦味が肉に移らないためである。白木に交差させる木は、枯れているが自立しているポプ

³ Government of Canada「ファースト・ネーションズ」

http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a_propos/faq-first_nations-indien.aspx?lang=jpn (2013 年 8 月 30 日更新)

ラを使う。枯れてしまったポプラより折れにくく、生木よりたわみにくいからである。シェッドの骨組みは松の木でつくる。火にくべるのは、ポプラか、レッド・ウイロウであり、松は使わない。どの木を伐りだせばよいか既に木を見分け判断する力が備わっている子ども達もいた。小さな子どもたちは木を運び出すのを手伝いながら、どの木を何に使うのか、覚えていく。また、自分たちだけが森を使うのではなく、後に来る人々のために、ポプラの木にマーキングをする。後に続く人々は、このマーキングをたどれば、有用な樹がある場所にたどり着けるといふ。



図1 ムース肉を干す小屋を建てる



図2 肉を干すためポプラの幹を削ぐ

それぞれの樹や葉に、どのような薬用があり、どう利用するかも、子どもたちに伝えられていた。干すとカリブーの角の形になる葉をお茶にしたり、レッド・ウイロウの幹を茹でて風邪に効く薬にする。松脂はオイルと煮詰めてピッチ

と呼ばれる万能の軟膏にし、ポプラの幹からとれる白い粉は虫除けにする。

キャンプにおいて、川でトラウトを捕獲する網を仕掛け、さばき、オープンエアシェッドを建て（図3）、燻製にして保存食とする技術を教える中心的役割はマリー・ジャックという女性が担っていた。彼女は現在でも1年のうち、3か所のキャンプサイトを移動した後、貯蔵食物を持ってホームグランドに戻り冬を越すという⁴。トラウトは3枚におろすが、切り離さない尻尾の部分を、ポプラの枝にかける。この枝は白木にする必要は無い。数日間24時間火を絶やさずスモークする。そのプロセスではコミュニティの人間が皆で気かけ、夜起きたときなど、それぞれが火を見守る。天気によるが、燻製トラウトは3、4日、乾燥トラウトは7日ほどで出来あがる。熊が出没する土地では、シェッドはトイレから程よい距離の場所に建てる。強い人間のにおいをアピールすることで、熊がシェッドを襲うことを避けるのだという。

キャンプには、ムースの頭を調理したものも差し入れられた。さまざまな部位が切り分けられ、皆が味わう。ムースの目玉が湖に還される時、そこにいた人は輪になり手を繋ぎ、祈りが捧げられた。トラウトの骨も湖に還され、やはり祈りが捧げられる。



図3 魚を燻すオープンエアシェッド

3.2 靴と帽子をつくる—モカシンと杉の樹皮織り

ビーズ刺繍、その刺繍を活かしたモカシンづくりは根気の要る作業である。子どもたちのた

⁴ 2013年8月15日バイクベイにてマリー・ジャックへのヒアリングを行った。

⁵ 2013年8月14日バイクベイにてジーン・カーリック氏へのヒアリングを行った。

め、家族のため、ゆっくりと自分の時間と意思を誰かのために使うという贅沢な作業でもある。モカシンづくりを子ども達に教えていたのはジーンという女性である⁵。「店で購入するモカシンと「モノ」としては同じかもしれない。しかし、手づくりのモカシンには、見えないものがたくさん詰まっている」と語る。ジーンも幼少時は家族でキャンプ生活を行い、ムース、羊、カリブー、鹿、ビーバー、ハリネズミ、などを狩猟していた。5才から寄宿学校に入学、多くのつらい体験をし、何度も逃亡を試みた。13才の逃亡時、当局はあきらめ追ってこなかったという。18才で大都会バンクーバーに住んだが、20才でアトリンに戻ってきた。現在は、結婚した娘一家が住む近郊都市ホワイトホースに住む。「クリンギットの伝統と知恵を伝えることができる自分無しに、孫たちが大きくなることが考えられない」からである。今でも、子どもや孫たちには「アトリンに住まなくても、どこに住んでいても、アトリンをルーツと思ってほしい」と考えている。

また、剥いだ杉の幹の皮を水につけ、柔らかくし、細く切り、市松模様に織る伝統の帽子づくりが行われていた（図4）。クリンギット族の伝統衣装、チルカットに併せてかぶる帽子である。キャンプには熟練した織り手が複数参加していた。余った樹皮は折りたたみ造花を形作り、キャンプを去る人に贈られた。



図4 杉の樹皮で帽子をつくる

3.3 彫刻と精霊のストーリー

ウエイン・カーリックはアーティストであり、

彫刻家である⁶。1979年から13年バンクーバーで働くのだが、1988年ジュノーでの祭りが人生を変えた。お祭りは、2年ごと4日間、各地のクリンギット6～8000人の踊り手が集結する。日ごろそれぞれが練習したドラム、踊り、歌をグループごとに披露する。ただ歌うのではなく、先祖も呼び寄せているし、目には見えない、触ることはできない、しかし感じることはできる、もう一つの世界への道も開いているのだという。この集まりがウエインに彫刻家として生きる決意をさせた。1992年からバンクーバーで、2006年から故郷のアトリンで、彫刻家として生活している。彼はアーティストとして、お面やカヌーを彫り、ドラムをペイントし、ブランケットのデザインをする。日常的に狩猟採集をし、伝統の歌の練習をリードする。彫刻家の役割はコミュニティに伝わるストーリーやスピリチャリティを知り、お面などを彫ることを通しそれらを表現し、伝えることである。子どもたちは、木彫や歌からスピリチャリティを理解するという。「子どもたちがそのようなことを理解するのは難しくないですか?」と尋ねると、ウエインは一笑に付した。人間は生まれた時はスピリチャルな存在だという。幼い子どもの方が、大人よりもよほど、神やスピリチャリティの世界に近い。ウエインも子どもたちに教わることが多いのだという。育つにつれてそのような世界から離れ、また年老いてエルダーになると、スピリットワールドに戻る。だから、子どもたちは、そのような世界のストーリーを即座に理解するのだそう。キャンプで木彫を初めて体験する子どもは、まずスプーンを彫る



図5 スプーンを彫る子

⁶ 2013年8月16日バイクベイにてウエイン・カーリック氏へのヒアリングを行った。

(図5)。自分が食べるものを口に運ぶ大切な道具である。ウエインは子ども達と彫刻を楽しみながらも、「キャンプでもっとも大切なことは、子どもたちが土地の知識を得て、自分と土地とのつながりを知ること」だと語った。

3.4 歌とドラム、火を囲む

キャンプに人々が乗ったボートが発着するたび、彫刻家のウエインはドラムを鳴らし、人々は自分の作業を中断し、発着場に集まり、手をさしのべながら歌を歌った(図6)。それは常に変化感動的な光景で、礼節を持って人を送迎する儀礼であった。クリンギット族の1つ1つの歌は誰かに属している。この発着で歌われていた歌は、カラス・克蘭のアントニア・ジャック⁷が伝える「すばらしいことを成し遂げた時の誉れの歌」とのことだった。

歌は送迎の時だけではなく、集いでも歌われた。キャンプの中心は火であり、食事、休憩など、皆火の周りに椅子を持ち寄り座った。特に夜、夕食後は皆が火を囲んで集い、その日のことを語り合った。思うことを率直にわかちあうよう励まされ、小さな子どもの発言も皆が傾聴し、しっかりと受け止められていた。火を囲み知恵や思いを交換しあうことは、北米先住民の

伝統のやり方⁸である。ドラムや歌はそこでも共有されていた。

3.5 言語

キャンプのプログラムでは、クリンギット語は毎日学ぶものとして位置づけられており、重要視されていることが分かる。クリンギット語の流ちょうな話し手は、クリンギット族全体でも数少ないとのことだったので、習熟にはある程度の時間がかかるだろうが、アトリンでは、公立小学校のカリキュラムにもクリンギット語の学習が組み込まれている。文字や、フラッシュカードなどによる単語の学習と共に、例えばベリーの採集という伝統行為の現場で言葉を覚えるという方法も取り入れている⁹。土地の自然環境や文化と密着している言葉は、現場で学ばれることが有効であり¹⁰、そのため生業や生活を学ぶトラツィネ・キャンプはクリンギット語を学ぶための環境として大変適していると考えられていた。キャンプに参加する子ども達には学校教育の中でのクリンギット語学習に加えて、キャンプの体験と関連づけた言語の学びが重要視されている様子がうかがわれた。

3.6 土地を知ること

聞き取りをした殆ど全ての大人が「土地を知る」ことの重要性を語っていた。ブライアン・ジャックは、オオカミ・克蘭のリーダーを務めたことがあり、コミュニティの精神的な支柱である様子がうかがえる人物であるが、「多くの人が土地に根ざして生きる方法を知らない。土地に根ざす生き方は、時間に縛られず、自由であり、人間は主体的に生きられる。政府は土地を経済の目で見ると、私たちの土地を見る目はそれとは違うものだ。土地が無ければ伝統もいのち(life)もない。単なる彫刻や刺繍で



図6 キャンプに人を迎える

⁷ 本稿で紹介するキャンプには参加していなかったが、ドラムを鳴らし歌を先導するウエイン・カーリックの叔母にあたる。アントニアの許可がありこのキャンプで歌われるということだった。

⁸ ボーラ・アンダーウッド『一万年の旅路—ネイティヴ・アメリカンの口承史』星川淳訳、翔泳社、1998年、p34

⁹ 2013年8月13日、アトリンのファミリー・ラーニングセンターにおいて、タミー・フェタリー氏、ミドリ・カービー氏へのインタビューを行った。

¹⁰ ニュージーランドの先住民、マオリ族は年長者しか話し手がいなくなりいったん消滅しかけたマオリ語を復興したことで知られている。その言語の教授法「テ・アタランギ」もマオリの世界観が生きた生活空間で、生活をしながらマオリ語を使うことで断片的ではなく有機的に言葉の意味がつかえる学び方である。アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム報告集作成委員会『アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム報告書』2013年、p76を参照。

はなく、土地を知り、水を知り、何があっても自分たちで自分たちの土地を守る強い人間を育てなければならない。先祖はお互いを育てながら生きてきた。何世代もかけて自分達の生き方 (way of life) を取り戻す決意だ。」と語る¹¹。妻であり弁護士であるジョアン・ジャックは「学校教育と土地の教育は両方とも大切だ」¹²と語り、夫のブライアンと共に N.A.K.I.N.A. call という「1年中キャンプをするホームスクール」を運営している。商業的漁業なら24時間魚を捕るだろうが、私たちは生きるために魚を捕る。必要なもの以外は捕らない。そのようなことが「土着の土地倫理 (indigenous land ethics)」なのだと語る。

また、キャンプにはコミュニティのサポーターであるアメリカ合衆国の NGO (Round River Conservation Studies (RRCS)) のブライアン・エヴァンスが訪れた。「クリンギットが健康なら、法的に土地を守ることが出来ることは、今までに証明された。土地が大切にされれば、クリンギットは健康でいられる。キャンプは子どもたちが土地を知る、土地に根ざした生き方を知るためにある。子どもたちが土地を知ることが大事なのであり、例えば、未来のいつか、道路を通したいという人々が訪れても、子どもたちが土地を守ることが出来る」¹³と語っていた。

キャンプを通し、伝統の生業と生活の中で子ども達に継承しようと大人達が意識していたのは、どこにどんな木があり、岩があり、水の流れがあり、動物があり、聖地があり、という土地自体を知ること、その重要性である。

3.7 人間は土地の一部という世界観

多くの人が合い言葉、あるいは標語のように繰り返していたのは、次のような言葉だった。「私たちは土地の一部 (We are part of the land)」、「私たちは水の一部 (We are part of the water)」、「皆はつながりあい、1つである (We are all connected, we are one)」や「他者への敬

意 (respect for others)」、「土地への敬意 (respect for the land)」、「未来世代のことを考えよ (Think of the future generation)」などである。それは土地、水、未来世代の人間、他者とのつながりに価値を認め、その価値に基づいた世界観を繰り返し再構築するもののように思えた。

「人間は土地の一部」とはどういう意味だろう。例えばオオカミ・クラン元リーダーのルイーザは「ムースは土地に生える薬草を食べる。人間はそのムースを食べることで健康でいられる。薬草が生える土地が健康であることで、人間は健康でいられる」¹⁴と語っていた。土地と人間のつながりを表す言葉でもあるだろうし、また「地球が人間のものではなくて、人間が地球のものである」という考えを表現しているものとも考えられる。

また、彼らは動物や魚を捕り食した後、「儀礼」を行う。ムースの目玉や魚の骨を自然に還し、祈る。そのように骨や目玉を丁寧に扱い、魂を土地に還すと、その骨などはまた肉と皮を身につけて、人間の前に現れてくれると考えられている。クリンギット族は人間を動物や土地の上位に位置づけるのではなく、それらとの交感を大切にする。自然の大きな摂理に従う感覚が、大人が子どもたちに語る言葉に込められているように思われた。

3.8 見えなかったものを見る力

白人が初めて訪れた時、クリンギット族のリーダーはタク・ジャックという人物であったという。シルベスター・ジャックはその子孫である¹⁵。彼は狩猟採集のためのサイトをたくさん持っており、多くのやるべきことがあるが、子ども達に教えることが最も大切だから、このキャンプへ来た。子ども達には、どう生きるのかを見せたい。学校は大事だが、自分がどこから来たのか忘れてはならないと語った。また彼は「何を見ようとするかは人が選ぶこと。見るもの、聞くものを選べば、その見えるもの、聞こえるものに、人間は驚くだろう」と語る。私

¹¹ 2013年8月14日ファイブ・マイル・ポイントでブライアン・ジャック氏にヒアリングを行った。

¹² 2013年8月16日バイクベイでジョアン・ジャック氏にヒアリングを行った。

¹³ 2013年8月16日バイクベイでブライアン・エヴァンス氏へのヒアリングを行った。

¹⁴ 2013年8月14日アトリンのルイーザの自宅でルイーザ・ゴードン氏へのインタビューを行った。

¹⁵ 2013年8月16日バイクベイにてシルベスター・ジャック氏へのヒアリングを行った。

たち人間は「自分が見たいもの」しか見えないと言われる。何を見ようとするか、見えるものを選ぶのは主体的な行為なのである。シルベスターは、こども達が今まで見てこなかったものを見るようになるために、別の生き方を見せたい、考えてほしい、と言っているのだろう。クリンギット族の人々は、見るものを選び直し「土地を知る」こと、さらに土地を知ること、見えなかったものを見る力を身につけるという生き方を子ども達に伝えようとしているのではないか、と思われた。

4. 子ども達の自然観

大人達の自然観や世界観は、子ども達に継承されているだろうか。クリンギット族の子ども達自身は、どのような世界観を持っているのだろうか。2011年8月にアデア・ジャック（当時10歳）とエブリン・ジャック（当時10歳）にカメラを手渡し、自分の「大切なもの」を撮



図7 植物の実を示すアデア



図8 植物を撮影するエブリン

影するよう依頼した。彼らの世界観、価値観の片鱗が写真の中に映されるように考えたからである。その写真を紹介する。

4.1 アデアの大切なもの

アデアはまず山の風景を4枚撮影した(図9)。5枚目は自転車、6枚目は4輪駆動のバイク(図10)、7枚目に風景、8枚目は玄関に飾ってあるポスターの下半分、9枚目はポスターの上半分、10枚目から4枚連続して飼っている鶏の写真、14枚目は古くなったボート、15枚目から5枚連続してベリーなどの実がなっている植物の写真(図11)という、合計19枚を撮影した。

山の風景が5枚ある。これは「土地(land)」だという。自転車は普段の移動に使うもので、4輪駆動のバイクは父親などと共に狩猟に出かけるときに使うものだという。ポスターには次の文字が書かれている。

Only after the last tree has been cut down,
Only after the last river has been poisoned,
Only after the last fish has been caught,
Only then will you find that money cannot
be eaten. (Cree Indian Prophecy)

(最後の木が伐り倒されたとき、最後の川が汚染されたとき、最後の魚が捕獲されたとき、その時初めてあなたはお金を食べることは出来ないと知るでしょう。クリー族の予言)

またアデアは植物の名前や季節に摘むベリーを教えてくれた。



図9 土地(アデア撮影 2011)



図 10 狩猟用 4 輪駆動 (アデア撮影 2011)



図 11 ベリーの実 (アデア撮影 2011 年)



図 12 漁労用網 (アデア撮影 2013 年)

2013 年 8 月のキャンプでアデアに再会した。2 年前にアデア自身が撮影した写真を見せて、これらは 2 年後の今でも大切に尋ねた。アデアは「当たり前だ。大切に決まっているだろう」と答え、さらにキャンプサイトにて大切なものの写真を追加撮影してくれた。2 年を経て撮影された 20 枚目は漁労の網 (図 12)、21 枚目は湖、22 枚目は山だが、この 2 枚はやはり「土地 (land)」なのだそう。23 枚目はモカシン (伝統の靴) を作るテーブル、24 枚目は捕獲した魚をスモークするオープンシェッドであった。

4.2 エブリンの大切なもの

エブリンは 1 枚目にソープベリーを摘んだものを撮影した (図 13)。彼女はクリンギット族伝統の「ソープベリーアイスクリーム」をつくる名手で、表彰もされているのだ。2 枚目は山 (図 14)、3 枚目、4 枚目は木立 (図 15)、5 枚目から 4 枚連続して植物を撮影した。7 枚目にボート、8 枚目に植物、9 枚目から 2 枚風景 (土地)、11 枚目から植物、12 枚目に植物の実、13 枚目に山と空、14 枚目に再度植物である。



図 13 ソープベリー (エブリン撮影 2011)



図 14 土地 (エブリン撮影 2011)



図 15 木立 (エブリン撮影 2011)



図 16 スモークされる魚 (エブリン撮影 2013)

エブリンも2年後の2013年8月に再会した折、アデアと同様に追加の写真を撮影してくれた。15枚目は釣竿、16枚目から3枚は土地、19枚目から2枚は松の木、21枚目から2枚はムースの肉、23枚目から2枚はスモークされる魚(図16)、25枚目は燻すポプラの木片だった。

いずれも、見事に土地の自然と、自然と関わるに人間の生活が表現された写真であった。2011年当時から、彼らは近代的な家に住み、家にはパソコンや携帯電話やテレビがあった。現在では、アデアは彼の親と同様に、facebookも活用している。彼らの周りの大人達のパソコン使用頻度も高い様子がうかがえる。しかし、そのような近代的な機器は自分の大切なものではないとする思考があると考えていいのではないだろうか。

5. 今日の意味

タク・リバー・クリンギット族の「生き方」の学びは、クリンギットの土地で学ばれて生きるものである。しかし本稿を閉じるにあたり、彼らの土地に根ざす学びの中に内在する今日の意義について少し考えてみたい。それにより、彼らの営みや世界観が「閉じたもの」としてではなく、私たちの地域における環境教育に生かす道筋、普遍性を考えることにつながっていくと思われる。

5.1 クリンギットであることの全体性

キャンプを通して、彼らが希求していたのは、クリンギットであり続けること、そのあり方を次世代に継承することであると思われた。そのためには彼らの土地や動物や植物、地に住むものの魂が必要であり、コミュニティや小規模な経済活動、伝統文化、超自然的なものとの関わりが相互にリンクする「全体性」が必要である。彼らは彼らの社会、経済、文化、宗教的側面を有機的に関わりあわせることで、クリンギットであることができ、そのようなあり方が、彼らのアイデンティティや幸福感を確保しているように思われる。その明確さは、例えば日本の都市に住む私たちが「私は何者か」「私たちであり続けるために何が必要か」と問い直す契機になりえるもののように思われた。大規模なシステムの社会の中にあり、私たちの社会活動、文化、宗教、生活、生業などの営みなどは、それぞれに分断されがちである。一つの文化のかたちや知恵、技術などが、そもそもどのような意味を持ち継承されてきたのか、生活や生業から分離し理解できなくなることは、日本においても多くの場面で指摘されていることである¹⁶。

5.2 自然と関わる人間の基本的な営み

動物を殺して食べるという彼らの営みをみると、日本で都市生活を送る私たちは、スーパーで購入した肉を食べるという「当たり前」の行為が、私たち自身の土地や自然から切り離された行為であることに気づく。また、彼らが動物の魂を自然に還す儀礼を見るとき、私たちの「生」は他の動植物の「死」によって繋がれるという「いのち」の不思議を、私たちは意識すること無く過ごしていることに気づくことができる。また、土地には多くの種類の薬草が生え、その薬草を食べる動物を人間が食べることで人間は健康を維持できるという彼らの「循環」の教えは、私たちの土地での循環を見つめなおす契機になりえる。

彼らが継承する生業は自然環境との関わりと

¹⁶ 例えば京都で人気の祇園祭が、巨大地震など天変地異を怖れ備える心から生まれたことを私たちは知らない。桑子敏雄「『空間の履歴』から読みかえる環境思想―「安全神話」の真実」『日本の環境思想の基層―人文知からの問い』秋道智彌編、岩波書店、2012年、pp.24-46

いう基盤にたち、身体性を伴った人間の基本的な営みが見えやすいものである。文明がどのように高度化しても、人間は息をし、いのちを食べて生きる。そのような「生きものとしての基本」が現代生活においては忘れられがちである。クリンギットの試みは、土地の自然に根ざす生業や生活を捉え直すことで、次世代に生きものとしての営みの基本を伝えるものといえる。

5.3 土地を知ることで守られる自然

人間が土地を深く知り関わり続けることで、その土地の自然を守り、次世代に継承していくことができる、とクリンギットの人々は考えている。日本における「自然保護」にもそのような事例が見受けられる。例えば諏訪のピーナスライン八島線という山岳観光道路を、着工を目前にしながら路線変更させることができたのは、観光による経済活性化の議論、自然の学術的価値の議論を越え、地域住民にその土地の「聖地」という意味が思い起こされたからであった¹⁷。土地を知るとは、その自然生態、人との関わりの履歴、特別な意味を持つ場、などを重層的に知ることだろう。人の手が適切に入ること、生物多様性や自然が守られるという考え方は、日本の「里山」とも共通するものであるし、東日本大震災後、人と土地との結びつきの強さは日本においても広く再認識されている。クリンギット族が語る「私たちの土地を見る目は、経済の目で見えるものとは違う」という言葉の意味を共有出来うような環境教育も必要なのではないだろうか。

5.4 自然への畏敬

クリンギットの人々は、伝統的な生業や生活スタイル、また土地を深く知ること、他者や自然とのつながりに基づいた価値観などを継承としているが、超自然性や人間の力や知性を超えるものへの畏敬の感性をもそれらに伴い伝承の対象になっていた。超自然的な自然への畏敬や、それに基づいた儀礼は、可視化されるかたちは異なるが、クリンギットのみではなく、日本に

においても、また世界中の地域で見られるものである。それらは現代において、古い迷信、非科学的な思考と片付けられがちだが、3.11の東日本大震災以降、自然との関わり方、人間と土地とのつながりを見直そうという社会の動きがある。触れるもの、見えるものだけではなく、森や木、水や岩、土地などに備わる聖性、動物やいきもののいのちや魂を認め、大切にできる能力は、次世代の生き方を豊かなものにするのではないだろうか。また環境倫理、自然保護的観点からも、土地の聖性を含む社会、経済、文化、宗教などの人間生活や生業と自然との全体性を持つ関わりの重要性を指摘したい。

おわりに

北米先住民クリンギット族の土地に根ざす教育の様子を紹介した。彼らの土地に対する観念、関わり、敬意などは世代を超えた歴史性を持ち、すぐれて意識的な教育を試みるものであり、私たちの「土地に根ざす教育」に新たな視点をもたらすものである。本稿で記述したような経験を踏まえ、日本の都市生活者である親子と共に北米先住民の生き方から学ぶ環境教育プログラムの実践を開始している。その詳細は別稿に譲るが、彼らの生き方を受容する日本の親子や参加者が、自身の日々の暮らしや自然観を相対化することにより、「私たちは次世代に何を継承していくのか」という問いかけに対するそれぞれの答えが立ち現われてくることを期待している。なぜクリンギット族の人々は継承を意識するのか、それは何を大切だと考えているからなのかという問いを深め、日本の親子による相対比較を通すことで、環境教育の大切な要素や手法が明らかになっていくように思われるのである。今後も土地に根ざす異文化地域理解による環境教育の実践研究を深めていきたい。

¹⁷ 関礼子「どんな自然を守るのか—山と海の自然保護」『環境の豊かさを求めて—理念と運動』鬼頭秀一編 講座人間と環境 12、昭和堂、1999年、pp.114-121

参考文献

- アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム報告集作成委員会
『アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム報告書』2013年
桑子敏雄「『空間の履歴』から読みかえる環境思想—「安全神話」
の真実」『日本の環境思想の基層—人文知からの問い』秋道智
彌編、岩波書店、2012年
- 関礼子「どんな自然を守るのか—山と海其自然保護」『環境の
豊かさを求めて—理念と運動』鬼頭秀一編 講座人間と環境
12、昭和堂、1999年
- 古川久雄「すべてはひとつ—カナダ先住民の心」『人間文化 滋
賀県立大学人間文化学部研究報告』4号、1998年
- ポーラ・アンダーウッド『一万年の旅路—ネイティヴ・アメリ
カンの口承史』星川淳訳、翔泳社、1998年

参考ウェブサイト

http://www.canadainternational.gc.ca/japan-japon/about-a_propos/faq-first_nations-indien.aspx?lang=jpn (2013年8月30日更新)